

海外における「日本祭」の共同研究に向けて

ジャカルタ「縁日祭」の下見調査報告

杉本 浄

Toward a Joint Research Project on 'Japan Festival' in Overseas
Report on the Preliminary Research of 'Ennichisai', at Jakarta, Indonesia

SUGIMOTO Kiyoshi

0. はじめに

かつて日本からの移民によってホスト国で主に行われてきた「日本祭」は、1980年代以降、各国への日本企業の進出と日本文化を世界にアピールしようとする文化政策により、一定の広がりを見せてきた。そこでは「伝統文化」として知られていた武道、茶道、華道、日本舞踊、琴、和太鼓が披露され、カラオケなどの当時の新しい文化、さらに日本製品の紹介・展示も加わった雑多な催し物に発展していった。昨今ではアイドルを招聘したり、コスプレ大会を開いたり、その多様化はさらに進んでいる。また、そうした場所では屋台や出店（でみせ）が立ち並び、日本の雑貨や食が幅広く紹介されている。主催者は現地の日本人会、大使館・領事館、日系企業、姉妹都市が加わった、複合的な実行委員会によって運営されることが多い。

本稿の目的は第1に2018年6月31日から7月1日、2019年6月22日から23日にインドネシア、南ジャカルタ市で開催された第9回と第10回縁日祭で筆者が行った参与調査について報告することにある。第2に縁日祭調査で得られた知見をもとに、将来的な共同研究として実施する予定の、海外における「日本祭」研究の可能性と方向性を探ることにある。

第1節では「日本祭」の歴史について、試論の域をでないものの概略してみたい。つづく第2節ではジャカルタの縁日祭の立ち上げについて、第3節から第4節までは、縁日祭の3年目の変化から今年の第10回に至るまでの道程をまとめる。最後にむすびとして、今後の共同研究の方向性について考察したい。

1. 海外における「日本祭」の概要

現在世界各地で見られるようになった「日本祭」は、当初は日系移民内の盆踊り大会といった移民コミュニティ内部の年中行事の一部であったと考えられる。この移民コミュニティの慰安と結束を促す祭りに、後に出身地の自文化をホスト国に紹介する相互交流のイベント要

素が加わっていった。とはいえ、そのスタイルと発祥は実に多様であると言わなければならない。それでも、今日見られるような複合的なお祭りを形成するようになったのは、古く見積もっても 1980 年代であり、日系企業の駐在員の多い都市で日本人会が形成され、大使館や領事館の後押しもあり、文化事業の一環として徐々に広まっていったと考えられる。ここでいくつかの例をアメリカに求めてみよう。

ロサンゼルスには日系移民の街として知られるリトル東京がある。ここで日系二世たちをターゲットとした「二世週」と名乗ったバーゲンセールが 1934 年より始まった。その後、お祭りの要素がこれに加わり、販促から「二世週祭」という夏祭りに変化していった（五明 2008: 146-147）。第 2 次世界大戦による中止はあったが、街の再建が落ち着きを見せた 1949 年にお祭りは復活している（五明 2008: 193）。現在は、「二世週日本祭(Nisei Week Japanese Festival)」として夏の 1 か月間に七夕祭りやパレードといった様々な行事を大々的に催している。

リトル東京とは異なるコンセプトで始まったのが、ワシントン DC の桜祭りである。1912 年にワシントン DC のポトマック河畔に、桜に思いを寄せる人びとの要請でヘレン・タフト大統領夫人の賛同を得て、東京市長より寄贈された 6000 本以上の桜の苗木の内の半分が植樹された¹。1927 年に第 1 回桜祭りが学校行事の一環として開催されるようになったが（海野 2017）、お祭りの要素が加わるのは後のことであつたらしい。1935 年に市民団体が祭りを拡大し、第 2 次世界大戦による中断を経て 1947 年に再開した。現在では開花前後のおよそ 1 か月間に桜祭り（正式には National Cherry Blossom Festival）が盛大に開催され、期間中は週末を中心におよそ 50 の行事が生まれ、延べ人数でおよそ 150 万人が訪れる。ただし、今日のイベント性の強い姿に変貌したのは 1994 年以降のことだった²。

この桜祭りは全米の主要都市にも拡散し、日米協会を中心に東海岸のボストンやフィラデルフィアだけでなく、西海岸のロサンゼルスやシアトルといった都市でも行われている。例えばシアトルでは 1929 年に北米日本人会によって、日系人を厚遇してくれた市に感謝するため 3500 本の桜が寄贈された。それから 47 年を経た 1976 年に、当時の首相だった三木武夫氏（同地に留学経験あり）が、1000 本の桜の苗木を寄贈したことを期に、桜祭りがこの年より開催された（岡村 2013）。また、ボストンでは 1912 年の桜の植樹から 100 年を記念し、2012 年に第 1 回ボストン日本祭（Japan Festival Boston）が 4 月に開催された。当初の予想を大きく上回る約 1 万 5 千人の来場者があり、現在は 7 万人を超える祭りになっている。2019 年の第 8 回目から 2 日間に拡大された。この祭りは姉妹都市の京都市との協力関係が特徴的である³。桜祭りの名称は各国で新たに催される日本祭りに使用されることが多い。

1980 年代に円高や輸出規制などの要因により、日本の製造業の海外生産移転が進むようになると、移転工場が集中する場所でも複合的な日本祭りが催されるようになった。アメリカ南東部のジョージア州アトランタでは「ジャパンフェスト（Japan Fest）」と称される日本祭りを 1986 年より続けている。入場料を取りながらも 9 月中旬に 2 日間開催され、昨年は両日で 2 万 2 千人の入場者があった⁴。1993 年から始まるヒューストンの日本祭（Japanese Festival）は、4 月上旬に行われ、こちらは入場無料である⁵。

他の国についても見ていこう。ブラジルではサンパウロで「フェスティバル・ド・ジャポン

「Festival do Japão」がブラジル移住 80 年を祝って 1998 年より開催されている。2017 年の入場者数は 3 日間で 18 万 2000 人にのぼり、入場料は 27 レアル（日本円で現在約 740 円）だった（桜井 2018）。それ以前の 1979 年にはサンパウロ七夕祭りが（根川 2008）、1981 年には桜祭りが第 1 回目の開催をスタートさせている（岡村 2012）。ブラジルではほかにパラナ州ロンドリーナ市で 1961 年より「日本祭り（後に EXPO JAPÃO）」が行われ、マリンガ市では「日本ブラジル祭」が 1989 年から、クリチバ市では 2 つの日本祭（春祭りと移民祭り）が開催されている。その後も、ブラジルの日系移民が多い各市に日本祭は広がっていった。

1950 年代より日系企業の進出により日本人の駐在者が増えた現在のドイツのデュッセルドルフでは、5 月の週末の土曜日に日本デー（Japan Tag）が開催される。この前身は、1983 年の日本週間にあるともされるが、実際に日本デーが始まったのは 2002 年のことである⁶。

以上のように日本祭りの発祥は一律でないことがわかる。移民の街で販促として始まったバーゲンセールが発展していった祭り、両国を橋渡しする協会メンバーの強い思いと協力関係ではじまった祭り、現地日本人会や大使館・領事館といった公的な機関、進出企業が協力しあつてできた祭りなどがある。また、その開始時期によっても祭りの性格が異なってもいた。祭りの変化それ自体が日本と海外との関係史を示していると言えなくもない。また指摘しなければならないのは、これらの国名を冠した祭り（例えばインド祭やインドネシア祭といった）が、1980 年代以降に日本においても盛んになってきたことである。その内容・構成は、国を越えた共通点が見られる。例えば、催し物の内容を見ると、そこには必ず伝統文化、新しい文化、食文化の紹介と体験コーナーがある。内容については各国で開催されてきた万国博覧会と比較するのも面白いだろう。

以下に紹介するインドネシアの南ジャカルタ市で開かれる縁日祭には大きな特徴が 3 つある。1 つは確かに行事内容に他国と共通した部分が見いだせるものの、多くの日本祭が運動場や見本市会場、公園あるいは街中の複数の公共施設を借りて行われるのに対し、縁日祭は実際の街中で一体感のある祭りを展開している点である。2 つ目は立ち上げから民間主体で運営されてきた点であり、3 つ目は現地ボランティアの数が非常に多い点である。

2. 縁日祭の立ち上げ

なぜ 2010 年に縁日祭は始まったのだろうか。その理由について、これまで祭りの実行委員長を務めてきた竹谷大世氏に聞き取り調査を行った⁷。2008 年にリーマンショックに始まる経済危機があり、ジャカルタから帰国する駐在員も多かったため、街の活性化のために祭りを企画したこと、さらに大使館が音頭を取って始めたジャカルタ日本祭り（JJM）を訪れた際にお祭りなのに入場料を取ることに疑問を感じたことが新しい祭りをはじめめるきっかけだったと語った⁸。「貧乏人は来なくてもいいよ、というのは祭りではない、みんなが楽しめるのが祭り」という明確な主張の下、竹谷氏は当初は 5 名の実行委員会を組織して第 1 回の縁日祭の準備に入った。竹谷氏の役割は協賛や協力資金を得るための外回りの仕事がほとんどであったという。委員の 3 名は広告・メディアを得意とする人たちで、何よりも縁日祭を知ってもらうための宣

伝が大事と考えた。また、出演やボランティアの応募もホームページを通じて行うため、ウェブ制作を重視したという。この時、公的機関からの後援は南ジャカルタ市だけだった⁹。

協力を求めたブロック M 地区はショッピングモールもある繁華街で、日本料理屋や居酒屋やカラオケ店などが立ち並ぶ地区である（図1，2）。通称をリトル東京ブロック M ともいう。竹谷氏はこの街で複数の飲食店を構えているのだが、祭りをはじめめる当初はやめた方が良い、街のためにならないと指摘する反対派が3割ほどおり、祭りを実施することへの同意を取り付けるのが容易ではなかったと語っている。それでも賛成派が勝っていると思った竹谷氏は実施を決めた¹⁰。



図1 ブロック M 地区の位置（出典：JETRO 『ジャカルタスタイル』 2018 年
https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2018/4841b3060c70781d/8_all.pdf）

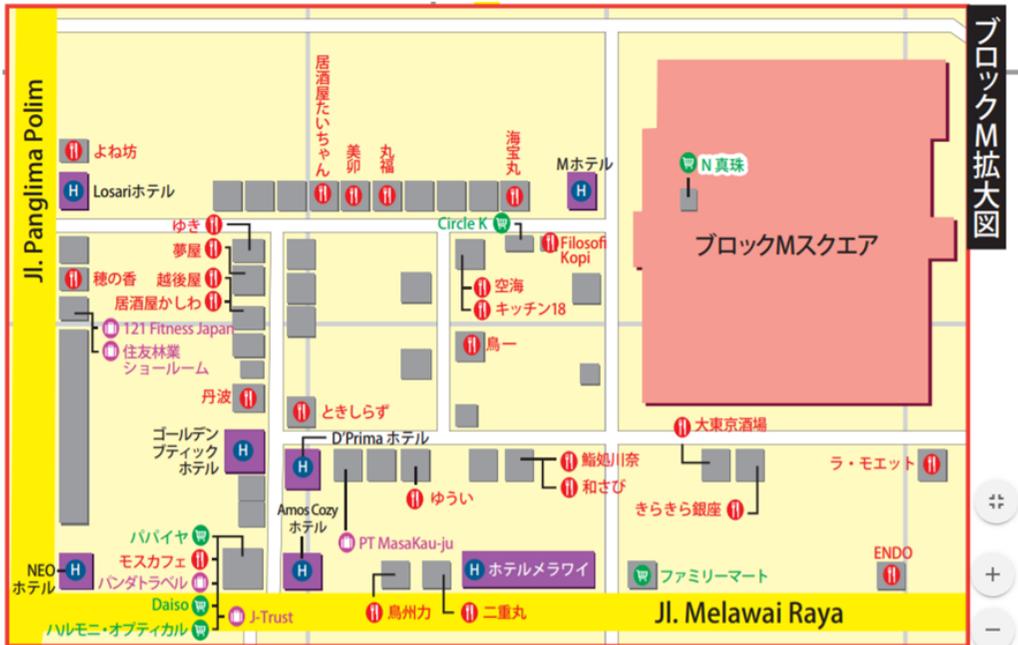


図2 ブロックM地区拡大図（出典：JETRO『ジャカルタスタイル』2018年

https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2018/4841b3060c70781d/8_all.pdf)

『じゃかるた新聞』の記事によれば、日本とインドネシアの友好促進とブロックMの活性化を目的に「七夕縁日祭」が7月4日に行われることを報じている。会場にはおよそ80軒の屋台が出て、金魚すくい、ヨーヨー釣り、日本の食べ物をそこで楽しむことができるという。催し物は沖縄のエイサーや学生バンド、コスプレ・コンテスト、演武、竹取物語のミュージカル、男神輿・女神輿の披露(写真1)、さらにごみリサイクルの講演も行われると伝えている。この時、雰囲気を盛り上げるためブロックMの街中に笹や竹を設置したが、あまり評判がよくなかったと竹谷氏は回想し、短冊もつけたが地元民の理解を得られなかったとも述べた。ボランティアを通したゴミ回収を徹底させる姿勢は、現在でも継続されている。また、飲食店街で祭りをを行うため、各店舗の営業の妨げにならないよう、ステージや屋台のテントの設営は深夜から明け方にかけて行われる。実行委員の人たちは徹夜で各設営の監督にあたるのである。初回の縁日祭は1日で約2万人が訪れた¹¹。

2011年の第2回は初めてその年の祭りにテーマを設けた。東日本大震災後ということもあり、「Pray For Japan 立ち上がれ日本」と銘打って、期間中に被災者のための募金活動も行った。期間も1日増え、7月9日と10日の2日間になり、両日で17万人がブロックMを訪れた。この時、インドネシアで製造された大きな山車も初めて登場し、日本人学校の太鼓部の子供たちがお囃子隊を務め、祭りを盛り上げた¹²。実行委員も5名から20人以上に増え、事前の壮行会も行っている¹³。



写真1 メイン・ステージ前。神輿と山車の渡御が1日3回行われる
(2018年7月1日筆者撮影)

3. 3年目の変化

2012年の第3回目は大きな節目の祭りになった。民間主導であることは変わらないものの、日本大使館とJETROの後援が付くようになり、また、前年の祭り終了後に実績が認められ南ジャカルタ市の公式行事として認定された。祭りは6月30日と7月1日に「ありがとう心の友」をテーマに催され、20万人以上を集めた。これまでの行事に加え、アイドルグループのJKT48やバーチャルアイドルの初音ミクが参加し、さらに世界コスプレ・サミットから公認され、インドネシア代表を決めるコスプレ大会がポップ・カルチャー・ステージで開かれた。他にメイン・ステージではラーメン早食い競争やじゃんけん大会も行われた（いずれも現在ではやられていない）¹⁴。

当時のホームページによれば、「縁日祭はブロックMの環境改善の為のイベント事業として、庶民が参加する民間主導の地域参加型の日伊文化交流イベント」であることが明言され、主催は縁日祭実行委員会ブロックMエステートと南ジャカルタ市、ムラワイ区、ブロックMレストランカラオケ協会等なった¹⁵。さらに、この縁日祭が「庶民のお祭り」であるため、「一定の階級層しか参加できないというような事はないよう、入場料は無料」にすること、「安全管理、緊急事態管理に関しては徹底強化に努め」ることを強調した。収益に関する説明においては、ブロックMがインドネシアに住む日本人の最も集まる庶民的な街であるため、「われわれ日本人がお世話になっているこの街を我々日本人が支えていこう」という趣旨のもとで、街の環境

改善に協力したい個人、企業団体からの協賛、協力金を募ることが明記された。

竹谷氏によれば、正直なところ1年目、2年目は祭りで出た赤字を取り戻すのに必死で、いつの間にかそれが目的になっていたが、縁日祭が急速に大きくなるにつれ、何のためにやるのかをマスコミなどから聞かれることが多くなり、日伊の文化交流や日本の文化紹介だけでは相手に納得してもらえなくなったという。それによって何が得られるのかを追求されるため、目的自体を自身で問い直すことになった。

彼によるとボランティアの皆さんが自主的に働いてくれるのは、赤字を取り戻すことが目的ではない。ブロック M という街で我々のような駐在員がいるということは、絶対に街に何かしらのお世話になっているはずだ。日本人の多くはここでご飯食べたり、歌を歌いに来たり、飲んだりしている。だから、この人たちに面倒くさいと思われることもあるだろうし、文化を押し付けてしまうこともあるだろう。誰しも多少なりともここで迷惑をかけているから、その恩返しを一年に一度祭りを通じてやろうではないか。お祭りという楽しさをインドネシアの人たちにプレゼントしようということに気づいた。このメッセージにみんなが賛同してくれるようになったという。例えば、インドネシアに赴任したばかりの人が、これからお世話になるのでボランティアを申し出てくる。こちらに長くいる人たちはなかなかこうはならないという¹⁶。以後、縁日祭はこの現地への恩返しというコンセプトをはっきりと表明していった。



写真2 アイドルのライブやコスプレ大会が開かれるポップ・カルチャー・ステージ
(2018年7月1日筆者撮影)

4. 拡大と定着

こうして明確なメッセージを持った縁日祭は 2013 年の第 4 回目は 5 月 25 日、26 日に開催され、テーマを「共に歩む」とした。これまでトラディショナル（メイン）とポップカルチャーの 2 つに分かれていたステージを全体の統一感と予算を考慮して一つに統合した。屋台は昨年より 20 店増加の 150 店。両日あわせて 20 万人以上が訪れた¹⁷。

2014 年の第 5 回目は 5 月 24 日、25 日に「飛躍」をテーマに実施され、ステージを再び 2 つに分けた。2015 年の第 6 回は 5 月 9 日と 10 日に実施され、テーマは「Always Smile!」だった¹⁸。入場者も増え 25 万人にのぼった。翌年の第 7 回は 5 月 14 日と 15 日に「奇跡-愛の力」をテーマに実施。初めて花魁道中が街を廻り、和太鼓チームの梵天も初参加した¹⁹。ボランティア参加もおおよそ 2 千人に及んだ²⁰。お祭りの資金は個人や会社からの寄付や広告費で賄われているが、この年クラウドファンディングで 1 千万円以上を集めた²¹。



写真 3 2018 年より新たに設けられた地下ステージ（2018 年 7 月 1 日筆者撮影）

2017 年の第 8 回は 5 月 13 日と 14 日に行われ、入場者数が 30 万人を超えるまでになり、会場の狭さが課題となり始めた。テーマは「挑戦-七転び八起き」で、実行委員も加わった太鼓チームの「弁天」もメイン・ステージでの縁日祭デビューを飾った。以前から力を入れていた祭り中のごみ収集作業であるが、日本の例に倣って新たに 3 種類のごみに分別できるブースを会場内に設置した。この年より文化財団を設立して、寄付金を受け付けることになった。また、寄付者には奉納札に名前と金額を書いて街に張り出すことになった²²。

2018 年のテーマは「情熱」。6 月 31 日と 7 月 1 日の祭り期間に 35 万人が来場し、新たにブ

ロック M スクエアーの地下に第 3 のステージが設けられるようになった(写真 3)。2019 年 6 月 23 日、24 日に開催された記念すべき第 10 回は「団結」をテーマにした²³。3 月にジャカルタ高速鉄道の MRT が開通し、会場そばにブロック M 駅ができたことで、あらかじめ来場者がさらに増えることが予想された。すでに屋台を増やすスペースも確保できず、セキュリティー上の問題もあり、別会場を考慮に入れる必要が出てきていた。2 日目のフィナーレにおいて、実行委員長より来年の開催がブロック M ではなく、別の広い会場に移る可能性が示された(写真 4)。



写真 4 縁日祭のフィナーレであいさつする竹谷実行委員長 右 (2019 年 6 月 23 日筆者撮影)

なお、インドネシアでは縁日祭の他に工業地域が広がる西ジャワ州ブカシ県チカランで始まった「さくら祭り」が 2012 年より実施されている。ステージ上では、阿波踊り、ソーラン節などの日本文化やバリ舞踊などのインドネシア文化、さらにミス・さくらコンテストやコスプレ・コンテストを開催したほか、さまざまな音楽グループが参加した²⁴。バリ島のクタでは「バリさくら祭り 2018」が日本とインドネシアの国交樹立 60 周年記念事業として 1 月 20 日と 21 日に行われ²⁵、2019 年も 2 月 2 日と 3 日に継続開催された。その他、大学の日本語学科の学生たちによる企画など、インドネシアは日本に関する行事が数多くある。

5. むすび

最後に今後の「日本祭」研究の方向性について提示して、本報告を終えたい。

今日、日本祭は世界各国の都市部で実施されているため、共同研究がふさわしいことは疑いようがない。本稿では検討できなかったが、日本祭りの現地ボランティアの人たちや祭りに来

る人びとの反応や感想も分析する必要もあり、現地に詳しい、できれば現地語が堪能な研究者の参加は必須であると考える。

研究のポイントとしては、第1に日本祭がこれまでいかに行われてきたのかを歴史的に究明し、日本文化の需要の変遷と各地の祭りの共通点と相違点に着目したい。現地の日本人会の横断的分析もこれに加わるだろう。先述したように、移民から企業の駐在員、さらに文化政策との絡み合いの中で、日本祭りも変貌をとげてきたのである。

第2に、現在、日本祭を通じて日本文化なるものがいかに表現され、需要されているのかを学際的に研究していくことである。例えば、縁日祭にみられる出し物は、どのように選択されてきたのか。日本のお祭りや海外の他の日本祭の相互影響の中で、武道、よさこい、エイサー、和太鼓、神輿と山車、コスプレ、アイドル、屋台といった、海外で受け入れやすい雑多な「日本らしい」文化が、単に受動的に表象されているわけではなかったことは縁日祭の例が示してくれている。縁日祭のきわめて興味深いところは、そうした文化を自らの表現手段として積極的に受容している人たちが多くことである。肝要なのは、縁日祭のような、人の活力を生み出すような空間が、いかに形成され得るのかをきちんと分析することだろう。

第3に、日本祭の各歩みを総合化することにより、日本近現代史を日本領土内の地点からではなく、外からの関係性において複合的に描写することが可能となるはずである。例えば、ワシントン DC の桜祭りを日米外交の美談に据え置き、日本文化の現地での理解と受容が進んでいった過程として叙述することは容易であるが、より複眼的な視座で解釈し直すこともできるだろう。すなわち、世界の変化と連動しながら、アメリカと日本の置かれた状況と関係性の変化の兆候を、桜祭りの分析を通して叙述することが可能と思われる。

共同研究の組織化において、構成される研究者に応じて以上の研究のポイントは見直されなければならないが、日本祭は様々な学領域の分析対象となりえることは間違いない。その際、雑種で多様で複合的な日本祭が、これまで人びとを惹きつけてきた複数の要因を探ることは、現代の人びとが求める新たなコミュニティのあり方を知る上で欠かせないテーマでもあるだろう。

註

- 1 残り半分はニューヨークのハドソン川沿いに植えられた (工藤 2012 : 27)
- 2 <https://nationalcherryblossomfestival.org/> (最終閲覧日 : 2019 年 7 月 22 日)
- 3 <http://www.japanfestivalboston.org/ja/aboutus/> (最終閲覧日 : 2019 年 7 月 22 日)
- 4 <https://www.japanfest.org/> (最終閲覧日 : 2019 年 7 月 18 日)
- 5 https://www.houston.us.emb-japan.go.jp/itpr_ja/190414_jf.html (最終閲覧日 : 2019 年 7 月 21 日)
- 6 <https://news.yahoo.co.jp/byline/norikospitznagel/20180617-00086524/> (最終閲覧日 : 2019 年 7 月 18 日)
- 7 竹谷氏に対する聞き取り調査は 2019 年 6 月 21 日南ジャカルタ市、24 日と 25 日デンパサール市で断続的に行った。

- 8 JJM は2008年よりスタート。昨年は10回目で9月8日、9日に実施された。ちょうどインドネシアと日本の国交樹立60周年記念の年と重なったため大々的に催され、日本から有名ミュージシャンを招聘した音楽フェスティバルも行われた。場所は中央ジャカルタ区スナヤンのブンカルノ競技場内。(https://www.jakartashimbun.com/free/detail/43664.html: 最終閲覧日: 2019年7月18日)
- 9 この年の7月はジャカルタ誕生祭にあたり、その行事と関連させると後援を得やすかったのだと竹谷氏は指摘している。
- 10 以上、竹谷氏への聞き取りから。
- 11 『じゃかるた新聞』(2010年7月5日)
- 12 『じゃかるた新聞』(2011年7月11日)
- 13 『じゃかるた新聞』(2011年6月30日)
- 14 優勝者は日本行きの航空券をプレゼントされ、名古屋で行われた本大会で見事3位を勝ち取った。2016年にインドネシア代表が優勝を飾っている。
- 15 <https://sites.google.com/site/blokmennichisai2012/en-nichi-sai-no-shushi> (最終閲覧日: 2019年7月18日)
- 16 竹谷氏への聞き取りから。
- 17 『じゃかるた新聞』(2013年5月27日)
- 18 <https://sites.google.com/site/blokmennichisai2015/> (最終閲覧日: 2019年7月18日)。なお、この時の準備から祭り実施に至る過程については「縁日祭 2015 ドキュメンタリー」としてYouTubeに公開されている。(https://www.youtube.com/watch?v=cTSVBxI7w8g 最終閲覧日: 2019年7月22日)
- 19 実行委員の主要メンバーでもある宮島伸彦氏が、旧知の梵天の代表である小林政高氏に招聘を持ち掛けて実現した。その後、実行委員長の竹谷氏を含め、「弁天」という日本人とインドネシア人の混成の太鼓チームが生まれた。翌年から小林代表が運営する未来太鼓道場の生徒たちも加わり、和太鼓に関しては「弁天」、「未来太鼓道場」、「梵天」がトラディショナル(メイン)・ステージに上がるようになった。さらに、2018年より「弁天」と小林代表はバリの日本語補助学校と交流し、子供たちの太鼓の指導を行い、今年2月の桜祭り、6月のバリ・アートフェスティバルで合同演奏を行った。これについてはまた別稿に譲りたい。なお、小林代表への聞き取りは2019年6月23日に神奈川県足柄上郡大井町で行った。
- 20 『じゃかるた新聞』(2016年5月16日)
- 21 <https://readyfor.jp/projects/6827> (最終閲覧日: 2019年7月18日)
- 22 『じゃかるた新聞』(2017年5月10日)
- 23 <https://www.jakartashimbun.com/free/detail/48164.html> (最終閲覧日: 2019年7月22日)
- 24 <https://www.jakartashimbun.com/free/detail/41181.html> (最終閲覧日: 2019年7月18日)
- 25 <https://api-magazine.com/article/detail/bali-sakura-matsuri-2018.html> (最終閲覧日: 2019年7月15日)。

杉本 浄

主要参考文献

- 海野優 2017 『ポトマックの桜物語—桜と平和外交—』学文社
- 岡村比都美 2012 「移民たちのさくら(2)～ユキワリサクラのルーツを訪ねて～」『櫻の科学』17号、pp. 31-33.
- 岡村比都美 2013 「移民たちのさくら(3)～シアトル桜祭日本文化祭について～」『櫻の科学』18号、pp.29-32.
- 工藤園子 2012 「ワシントンDCポトマック河畔の桜里帰り事業」『櫻の科学』17号、pp. 27-30.
- 五明洋 2008 『リトル東京』青心社
- 桜井悌司 2018 「ブラジルにおける日本祭り」『ラテンアメリカ時報』No. 1422、pp.10-13.
- 根川幸男 2008 「ブラジルにおけるエスニック日系新伝統行事の創出—七夕祭りの再創と展開を中心に—」『移民研究年報』14号、pp. 71-82.

定期刊行物：

『ジャカルタ新聞』(2010年7月5日、2011年6月30日、7月11日、2013年5月27日、2016年5月16日、2017年5月10日)

Web:

- アピ・マガジン (<https://api-magazine.com/article/detail/bali-sakura-matsuri-2018.html> 最終閲覧日：2019年7月15日)
- 縁日祭 2013 (<https://sites.google.com/site/blokmennichisai2012/en-nichi-sai-no-shushi> 最終閲覧日：2019年7月18日)
- 縁日祭 2015 (<https://sites.google.com/site/blokmennichisai2015/> 最終閲覧日：2019年7月18日)
- 「縁日祭 2015 ドキュメンタリー」 (<https://www.youtube.com/watch?v=cTSVBxI7w8g> 最終閲覧日：2019年7月22日)
- ジャカルタ新聞 (<https://www.jakartashimbun.com/free/detail/41181.html> 最終閲覧日：2019年7月18日)
- ジャカルタ新聞 (<https://www.jakartashimbun.com/free/detail/43664.html> 最終閲覧日：2019年7月18日)
- ジャカルタ新聞 (<https://www.jakartashimbun.com/free/detail/48164.html> 最終閲覧日：2019年7月22日)
- シュピッツナーゲル典子「たった1日で60万人を動員したデュッセルドルフの「日本デー」の魅力とは？」(<https://news.yahoo.co.jp/byline/norikospitznagel/20180617-00086524/> 最終閲覧日：2019年7月18日)
- 在ヒューストン日本国総領事館 「ジャパン・フェスティバル・ヒューストン 2019」(https://www.houston.us.emb-japan.go.jp/itpr_ja/190414_jf.html 最終閲覧日：2019年7月21日)
- ボストン日本祭り(<http://www.japanfestivalboston.org/ja/aboutus/> 最終閲覧日：2019年7月22日)
- JapanFest Atlanta (<https://www.japanfest.org/> 最終閲覧日：2019年7月20日)

海外における「日本祭」の共同研究に向けて

National Cherry Blossom Festival (<https://nationalcherryblossomfestival.org/> 最終閲覧日：2019年
7月22日)

Ready for (<https://readyfor.jp/projects/6827> 最終閲覧日：2019年7月18日)